琉球新報
2008年(平成20年)
7月11日金曜日

落ち穂

薬物依存治療施設

三浦　陽二
（沖縄ダルク・チーフディレクター）

沖縄ダルク・リハビリテーションセンター（民間の薬物依存治療施設）が沖縄に乱入してから、来年の二月で十五年の年月がたつ。「あっ」という間であったと感じてはいますが、その間に潰れずに持ちこたえられたのは、沖縄の皆様の暖かいご理解やご支援の賜物です。この紙面をお借りして改めてお礼申し上げたいと思います。

本来なら私共の様な施設は最初にきちんと計算をして、採算が取れるのかどうかを考えてから始めるものでありますが、ダルクは違いました。多分きちんとした人がきちんとした計算をしたら、始められないのがダルクであると妙な自信さえあります。ですから、いつも家賃の支払いや、光熱費の支払いすらドキドキさせられてしまうのです。

しかし不思議なのは、現在五十余（二〇〇八年現在四十九カ所五十二施設）ものダルクが全国に在って、どこのダルクも同じように困っているはずなのに、一九八五年にダルクが東京に誕生して以来、潰れてしまったダルクはないのです。原因の一つは、信用がなく借金が出来なかったという事があげられます。つまり潰れようがなかったと言えるのかもしれません。

けれども私は社会に必要とされている限り、潰れてしまわないのがダルクであるとも思っています。いや思い込んでいると言った方が良いのかもしれません。家賃が払えないで胃が痛んでいると、不思議な事にちょうど家賃分ぐらいの金額が献金されてきたりする事は、今までの活動の間に何回も起こった出来事なのです。（とはいえその様な不思議な事を当てにして手を抜く事は厳禁です!!）

薬物依存症に対する私達の方法は現実的で、本人同士が助け合うという治療の価値は、他に比べるものがないのです。薬物依存症者は他の薬物依存症者の最も優れた理解者であり、援助の手を差し伸べる事が出来るのです。吹けば飛んでしまう様な弱小施設ですがこれからも温かく見守って頂ければ幸いです。

未筆になりますがこれから半年間、読みにくい文章かもしれませんが、一生懸命書かさせて頂きますのでよろしくお願い致します。

みうら・ようじ　1963年生まれ。米国の研究所でリハビリテーションスタッフ研修後、沖縄ダルク開設スタッフとして赴任。現在チーフディレクター。